# 第24回ワークショップ（論文構想発表）

2013年6月26日開催

■資料[1]

大河内 泰樹「コミュニケーションのコンテクスト：言語の政治性（仮）」(2013.6)

武村 知子「構造が表層化する」 (2013.6)

---

## I.　コミュニケーションのコンテクスト：言語の政治性（仮）（報告者：大河内 泰樹）

### ■報告要旨

ヘーゲルは、『精神現象学』理性章において、カントの定言命法をひとつの具体的な発話ととらえることで、それが文脈を踏まえた仮言命法とならなければならないことを指摘し、カントの形式的普遍的な道徳論を批判している。現代政治哲学においても、ロールズ、ハーバーマスらはカント的形式主義として、これに対抗する文脈主義はヘーゲルと結びつけられて議論されてきた。しかし、少なくともハーバーマスをとってみると、彼のコミュニケーション理論が、生活世界における了解の地平として伝統をおいていることから、文脈を無視した普遍性だけに依拠しているわけではないことが分かる。しかしまた、そうした伝統の一部を主題化し、批判的に検討することの可能性も担保されており、さらにそうした了解が次の世代へ新たな地平として伝承されることになるのである。このように解釈学的な構造の中で批判可能性を担保する理論構造は、R. ブランダム、J. バトラーにも共通していると言えるが、この理論構造の中で、政治をどこに位置づけるかに違いがあると考えられる。そこで、とくにバトラーのヘイトスピーチに関する議論を参照しながら、ハーバーマスが政治からは切り離した、言語使用の規範性の領域にすでに政治が入り込んでいることを示そうと試みた。

### ■ディスカッションの内容

初めに、哲学的な議論の流れの中にバトラーの議論を位置づける意図を問う質問が提起された（大杉）。それに対して、バトラーが限定された文脈で展開している議論をある程度一般化する必要を感じたこと、また、議論を図式化することで論点を整理する意図があったことが、報告者により回答として提示された。次に、哲学者によって“政治的なもの”に与えられた位置（前提/結果）が異なることに注目した整理が行われている、との理解が示されたうえで、ヘイトスピーチの哲学的議論における位置づけと、哲学的な文脈

[1] 文献は、本先端研HP（http://www.soc.hit-u.ac.jp/~decontext/）から入手可能。

の中でヘイトスピーチを論じる意図を問う質問があった（井頭）。報告者の回答は以下の通りである。ハーバーマスの議論ではなく、バトラーやブランダムの議論を通してヘイトスピーチを考察したのは、ハーバーマスの議論の枠組自体への疑いから、討議の結果として得られる合意の位置において政治を扱うのとは別の仕方でヘイトスピーチを批判する枠組が必要になると考えたためである。哲学的議論の文脈でヘイトスピーチを論じたのは、ヘイトスピーチに介在する政治性がどのようなものかを見極めることで批判の基礎を築く意図があったためである（大河内）。関連して、ハーバーマスが「語用論的規範」と呼ぶ、合意によって変えることのできない規範が、具体的にどのようなものとして想定されているのか、語用論的規範とそれ以外の変えることのできる規範との線引きがどのようにしてなされ得るのかといった質問（武村）に対して、ハーバーマスが語用論という言葉を用いるときには、言葉の意味内容ではなく言語使用の形式的・普遍的規則が問題となっている、との返答があった（大河内）。また、政治性または政治的主体の生成を、「主体の能動性の発露」と見るか、呼びかけにたいする応答の不完全性を強調する視点から「偶然的で不確かなもの」と見るかによって、文脈を議論する仕方が変わってくるのではないか、との指摘があった（大杉）。その後、バトラーの発話内行為と発話媒介行為の区別の妥当性やブランダムの合理性の五つの構想をめぐって、議論が展開された。

## II. 構造が表層化する　（報告者：武村 知子）

### ■報告者 による解説

まず、平成23-24年度の科研費研究「電子文書におけるスタイルの抽出・計量及び検索に関する基礎的研究」から、人文学的考察の一部を抽出して報告した。電子媒体においてテクストが表示される際に介在するマークアップ言語（ソースコード）それ自体のテクスト性は、表示される自然言語テクストのそれに対してどのように位置づけられるべきか。電子媒体における「本文」とはすでにソースコード以外の何物でもないのではないかと考えてみる思考実験を、報告者自身のウェブサイト「melanchologia universa 」の「工事中」ページを例として解説提案した。

こうした思考実験はこのウェブサイトのテーマである「メランコロジー」の重要な一環であるので、引き続いてこの関連及び「メランコロジー」に関して若干の説明を行った。近代人文学を牽引した両輪として印刷媒体とメランコリーを考えるのが「メランコロジー」の基本姿勢である。その主要な分析ツールとして「メランコリーの籠」を紹介した上で、マイスター・エックハルトの説教テクストを例にとってこの「籠」の使いかたを解説した。この説教はリニアーな主張を汲みとることが困難な類のものであるが、「籠」を使うことでその構造的ダイナミズムが抽出できる。

### ■ディスカッションの内容

まず電子文書のスタイルに関する研究で提示された、ソースコードを本文またはテクストと呼んでみてはどうかという提案の、背景を問う質問があった（大杉）。これを受けて、報告者から、「シンプル（ピュア）テクスト」といった考え方ないし、「作者」による「本文」が持つ権威という観念がウェブという表現媒体において変容を強いられているのではないかという問題があり、にも関わらずウェブ媒体におけるオーソリティの問題が著者・出版社・デザイナーという紙媒体におけるオーソリティのヒエラルキーを導入して語られ続けていることは遺憾である、との返答があった（武村）。また、これらの関心とメランコロジーとの接続に関する質問（大杉）を受けて、ルネッサンス期に連動して生じた変化（＝ファウスト的欲望—世界総覧の野望、測量技術-数値化の営みの再評価、印刷技術の発展）を基点として近代人文学とメランコリーを考える場合、両者の結合を支える基盤としてのテクスト媒体をその本質において考察することは必須である、との返答があった。

セッション後半は、ウェブ媒体の特徴について議論が集中した。まず、ウェブのように否応なくその視覚的なイメージが意識されるような媒体に言語作品（テクスト）が受肉化される時に改めて出てくる問題として、「作者」に関する問題があるように思う、との指摘があった（井川）。また、デザイン要素もコード化される（> CSS）ウェブ媒体では、その最終形態であるデザインについて明確なイメージや意図を持つことなくひたすら“文法的に正しいコードを書く”というような、テクストとの新たな関わり方が生じる可能性があり、そこが興味深い、といった発言があった（大河内）。

次いで、新たな表現媒体（＝ウェブ）の登場により生じた変化を捉える視点に関して、新旧の交代や制度間の移行として変化を見るというより、その媒体の登場によってそれまで表現行為を拘束していた前提が明らかになり、その前提の自明性が弛んでいく過程として捉えようとしているように見える、との指摘があった（安川）。具体例として、言語テクストの制約性であるlinearityを撤廃しながら、文章化の際にはその制約性を可視化する契機ともなる、ハイパー・テクストをあげることができる。そのハイパー・テクスト的なものと今回のエックハルトに見られたようなテクストの言語的ダイナミズムとの間に発想の連続性を指摘するコメントを受けて、印刷技術の発展を人文学が担ったという歴史的経緯から見れば逆説的だが、人文学というジャンルの存続と新たな展開のためには書物のある種の束縛から逃れなければならないだろうとの見解を報告者が述べる場面があった。

（了）